

実践活動報告書

蓬莱日本語教室 佐々木千賀子

1. 実践活動の名称

外国にルーツを持つ子どもたちの支援者のネットワークづくりとしての
「多文化に生きる子どものためのアレコレ話す会」

2. 活動の目的

- ・外国にルーツを持つ子どもたちの支援者が情報交換や、悩みを相談するためにゆるいネットワークを作り、外国にルーツを持つ子どもが自分の目標に向かって進んでいけるよう応援する
- ・外国にルーツを持つ子どもの支援活動をまだ行っていない人でも、子どもを取り巻く環境や、支援のための知識や技能、態度を知り、支援活動に携われるようになる
- ・私たちの地域には多様な背景や能力を持った外国人・日本人がいることを認識し、多文化共生社会の実現を目指す

3. 背景

- ・福島県には（公財）福島県国際交流協会の「多文化共生・国際交流協会人材バンク制度」や福島市の「福島市外国の子どもサポーター派遣事業」など、外国にルーツを持つ子どもをサポートする制度があり、地域住民がサポーターとして登録している。しかし、昨今サポーターの数は減少傾向にあり、学校から支援要請があってもうまく対応できないケースが少なくない。
- ・（公財）福島県国際交流協会や福島市が日本語支援者の養成講座を開催し、多くの市民が受講しているが、支援者として人材登録をする人はそれほど多くなく、支援者が不足している
- ・支援者同士で支援方法や悩みなどの情報交換をする機会が少なく、支援者としてスキルアップしようにもどうすればいいのかわからず困っている人がいる。
- ・多文化共生社会の実現に向けて行動するためにも、さまざまな立場の人たちと交流し、知ることが大切だと考える。

4. 参加者

福島県内外の住民 のべ21名

5. 活動内容

- ◆ゼロ回 2021年10月30日 会場参加8名、zoom参加3名
 - ・自己紹介
 - ・当会の立ち上げの主旨説明
 - ・参加者の背景も含めて、この会に何を求めるか、何がしたいかを話す
「悩みを聞いてもらいたい・相談する場がほしい」「未経験の自分が何ができるか確認したい」「行政書士としていろいろな外国人に接してきたので、その経験を活かした支援活動を知りたい」など
- ◆第1回 2021年12月18日 会場参加7名、zoom参加3名
 - ・県立高校の教諭からの事例紹介
「学校内での取り組み」「学校・家庭・地域との連携の方法」「対象生徒の様子」など
 - ・当会の今後の運営について
世話人決定、当会の名称は次回まで考えてくることの確認 など
 - ・次回の内容について

学校で個別対応の日本語指導を行っている支援者2名による事例紹介

6. ゼロ回、第1回の実施の振り返り

外国にルーツを持つ子への支援活動をしている人と、子どもたちに接したことがないが関心を持っている人が混在しているので、知識がなくても安心して話せるようにすることを心がけて進めたこともあり、参加者が今の自分が考えていることや知りたいと思っていること、自分が経験したことを気軽に話す様子が見られた。支援者の悩みを参加者が真摯に受け止め、ともに考えていた。

アレコレ話す会（仮）を2回実施し、アンケートをとった。会に参加しての気づきや、自身の活動に役立ったかどうかという問いに対して、会の目的に沿った答えが寄せられている。「自分自身はまだ子ども支援の活動には携わっていないが、参加者の実践の話を聞くことで現場の実態を知ることができた」「先生たちの実践は自分が支援する際のヒントになった」などと回答している。「子どもの支援のために家庭への支援も必要なことが多い、福島には点の支援はあるけど面の支援がまだできていない、現在日本人中心のコミュニティに「支援の対象」としてではなく「コミュニティの一員」として参加できるように働きかけが必要」（原文ママ）という答えは、多文化共生社会を意識し、それに向けて私たちは何ができるか考えるという姿勢が表れている。

7. 所感

この会でこれから何がしたいかという質問には、「情報交換」「行政主導ではない外国人／多文化共生サポーター同士のコミュニティづくり」「地域のボランティア教室の人、学校で日本語指導をしている人、行政書士など様々な人たちが参加しているので、その立場でのお話を聞きたい」「日本語指導のスキルをみんなで勉強したい」などの意見が寄せられている。そして、約7割の人が今後も参加したいと答えていることから、「ゆるく」つながりながら、外国にルーツを持つ子どもたちを応援し、外国人住民もコミュニティの一員であると認識し、ひいてはそれが自分たちの地域社会をより良いものにするのだと意識しながら「細く長く」会を続けていくことの意義を感じた。

8. 課題

日本語ボランティア、市職員、高校教諭、大学教授、行政書士など様々な立場の大人たちが参加しているが、外国にルーツを持つ子どもやその保護者と直接接している人たちの話もお聞きしたいと考えている。外国人住民、外国にルーツを持つ元子ども、スクールソーシャルワーカー、外国にルーツを持つ子どもが在籍している小中学校の先生たちや教育委員会の先生、民生委員などにも参加してもらうためにはどうすればいいか考えなければならない。さまざまな団体との連携を図ることも地域日本語教育コーディネーターに求められているので、連携の取り方を学ぶことが私の課題の一つでもある。

また、ゼロ回と第1回は、蓬萊日本語教室の佐々木が主催者となり開催したが、今後は世話人を中心とし、参加者に「自分たちの会」だという意識を持ってもらい、能動的に関わってもらいたい。そのために、自分たちでミニ研修会のような小さいイベントを企画、実施することでその意識を持ってもらえないだろうかと考えている。

9. 今後の予定

◆2022年2月19日（土）多文化に生きる子どものためのアレコレ話す会 第2回の開催

- ・学校で個別対応の日本語指導を行っている支援者2名による事例紹介
- ・今後どのように進めるか世話人で話し合う